

担う時代である。当塾は発足以来“次の世代を育む志”を理念として掲げ、よりよい医療・保健・福祉の実現を目指して“次世代の医療を担う人材育成”を目的に活動してきた。

ことあるごとに「今時の若者は…」と言われる中、医療面接トレーニングで対峙する未来の医師は、一人ひとりが一所懸命で爽やかである。彼らには、医療改革という時代のうねりに翻弄され飲み込まれることなく、「こんな医師でありたい」と志している「そんな医師であってほしい」と思う。

彼らとの触れ合いの中から、彼らが医師を志した時に抱いた初心を萎えさせない教育と研修と実践の場の実現をもっともっとお手伝いできないかという思いが膨らんできた。その一つが、学生の手による自然発生的な学びの場をサポートする、いわゆる「出世払い学習会」であった。

今年4月、その学習会を発展させる形で「共に学び合う学生自主講座企画」をスタートさせ、支援第1回が、この5月に実施した「イリノイ大学CPC見学ツアー」(<http://plaza4.mbn.or.jp/~kuntohj/> 参照)だ。全国から募った学生に、アメリカの医学教育現場を見学、体験する機会を提供した。第一期生は学校・学年の枠を超えて切磋琢磨し、学び合った(図2)。

この企画の反響は大きく、早くも支援第2回の企画が決定し、第二期生が誕生した。「医学の歩き方 Presented by Med-Pearls Sharing Project」のメンバーたちである(<http://www.Med->

Pearls.com/参照)。参加者一人ひとりの珠玉を共有し学びの輪を形成することを目指している。

私どもは、“薫陶”という言葉に負けない凛とした姿勢で、「次世代の医療を担う人材」と学び合い、育み合っていきたいと思っている。

看護職の研修を通して 思うこと

当塾のSPは、看護師研修や看護学生対象のコミュニケーション演習でも、入院患者やその家族などを演じている。終了後の振り返りは、お互いにとって、とても実りの多い時間だ。「大切なことは、目の前の患者、家族を何とか治したいと思い、そのために患者の状況、心情を少しでも解ろうとする一所懸命さである。それが患者に伝わり、お互いのこころが響き合う」という感想がよく出てくる。コミュニケーション能力は知識の豊富さや経験年数に依らない、ということではないだろうか。

まだ経験が浅く専門知識が少なかった頃の瑞々しい感性を思い出し、初心に立ち返ってほしい。

また一方、看護師が医師の代弁者になりそうな時、患者はがっかりするものである。かといって患者のわがままを聞くばかりでなく、中立的な立場を貫けるだけの高い看護知識、手技を身に付けた上で温かく接して



図2 イリノイ大学CPC見学ツアーメンバー(前列左から7番目が筆者)

いただきたい。非日常的な場に放り出される患者・家族は、そのような意識の高い医療専門職の存在を身近に感じる時、どんなにか勇気づけられることだろう。患者の治療効果を高める要因は、案外そんなところにあるのかもしれない。

薫陶塾のこれから

医療がよりよく変わっていくためには、それに関わるありとあらゆる人——患者や家族も含めて——の認識が高まり、行動が変わっていくことが必要である。

SPを用いたシミュレーション・トレーニングは、「しなければならない」「すべきである」と理屈や言葉で訴えるのではなく、「あ、そうだったのか」という気づきを促し、さらに学習へのモチベーションを高める体験・参加型の学習である。

各教育機関や医療現場で医療コミュニケーション能力育成の方法論に関する試行錯誤が続いている中、非常に有効な方法として、このSPを用いたシミュレーション・トレーニングを推し進めていきたい。